

国民経済計算体系的整備部会・懇談会 (12月11日):補足説明資料(その2)

懇談会では、委員から

「関根委員が推計した α 、 β が、 $\alpha + \beta < 1$ となっているのは、QEの需要側・供給側推計値の前年比変化率は、年次推計値の変化率よりも、平均的に大きくなっていることを意味する。これには、何か必然性があるのか」

との発言があった。

QE需要側・供給側推計値、年次推計値の前年比変化率(1995～2014年<2000年を除く>)について、事務局で事実確認を行ったので報告する。

2018年1月22日
統計委員会担当室

- 年次推計値とQEの需要側・供給側推計値について、前年比変化率の絶対値平均を比較すると、1995～2014年においては、国内家計最終消費支出のQE需要側推計値を除き、QEの需要側・供給側推計値が年次推計値よりも大きくなっていた(下表)。
- ✓ これは、同期間においては、QEの基礎統計である動態統計(生産動態統計、法人企業統計など)の変化率が、年次推計の基礎統計である構造統計(工業統計など)の変化率よりも、平均的には大きくなる傾向があった可能性を示している。
- ✓ しかしながら、QEと年次推計では細分化のレベル等を含め推計手法が異なるほか、公的固定資本形成の改定幅にも影響される(注:民間企業設備は総固定資本形成から公的固定資本形成や民間住宅を控除して推計される)。このため別な要因による可能性もある。

▽ 家計消費・民間企業設備の前年比(1995～2014年<ただし、2000年を除く>、%)

	国内家計最終消費支出		民間企業設備	
	変化率平均	同絶対値平均	変化率平均	同絶対値平均
年次推計値	0.56	1.16	-0.27	5.60
QE需要側推計値	0.59	1.11	-0.44	6.65
QE供給側推計値	0.63	1.26	-0.32	6.08